

第一巻 資本の生産過程、 第四篇 相対的剰余価値の生産、
第十二章 分業と工場手工業

マルクス『資本論』入門 河出書房新社刊 より
『資本論』完全解説 的場昭弘著

- 生産性の上昇は、一般には新しい機械が導入されることによって始まる。
 - ・歴史的にみて、最初の変革は協業である。
 - ・あちこちの仕事を、一か所に集める。
 - ・一か所に集めることで、時間の無駄が減り、効率化する。
 - ・お互いが競争意識を持つことで生産は倍増する。
 - ・競争心が養われ、やがてそれぞれ作業過程がいくつかに分業される。
 - ・分業、すなわち労働過程の分割である。
 - ・労働過程の分割が工場内で行なわれる場合は工場内分業、社会全体で行なわれる場合は社会的分業という。
- 分業によって生産性は格段に進歩する。
 - ・機械制大工業は、分業や協業の導入なしに成立しない。
 - ・分業と協業によって養われた労働者の自己管理能力が、機械と結びついたとき、初めて機械制大工業が発展する。
 - ・機械制大工業は、機械によって一気に生産力を増大させ、労働者の労働能力を高める。
 - ・それによって労働者が機械の動きにあわせて仕事をする。このことで労働強化が実現される。
 - ・機械の導入は、労働時間を引き下げたり、労働者の労苦を軽減するというように目的があるのではなく、労働者が創りあげる剰余価値の増大を目的としている。
 - ・機械は人間の苦痛にとって代わらず、むしろ労働者を強制することで、労苦を増やすことになるのである。

「あらすじとイラストでわかる資本論」 文庫ぎんが堂

- ・資本主義生産体制が発展すると、多くの労働者が集められて生産する協業は、その特別な体制である「分業」生産をなすようになる。
 - ・そしてこの分業体制が歴史において実現されたのが、工場手工業（マニュファクチャ）だ。
 - ・分業では、労働者の役割分担が細分化され、専門的になり、より体系づけられた生産体制をとる。
 - ・例として時計生産での工場手工業を見てみる。時計の生産には、バネ製造工、文字盤製造工、指針製造工など、完成するまでに約 30 工程を経る。
 - ・手工業ではひとりの職人がすべてをこなすが、分業では各工程に専門の労働者をつける。
 - ・すると熟練時計職人が製造するよりも格段に生産力が高まる。それが分業だ。
 - ・以前は複雑で多くの部品を必要とする製品をつくるのに、それぞれの部品専門の職人が独立して、生産していた。
 - ・資本主義体制の発展とともに起こる生産力の増大は、初めから計画的にこれらをひとつの空間に集めようとする。
 - ・つまり工場に集め、それぞれの工程に必要な労働者を計画的に配分する。
 - ・このことで、ひとつの作業から次の作業へ移る際に生じる時間のロスがなくなり、各工程間がスムーズに連携する。
 - ・各工程に必要な道具は、特殊な作業に応じて、種類が増えてくる。
 - ・そうして分業体制は、同じ時間内により多くの商品を生産する。

- ・手工業で最も大切にされた熟練した技術は、分業体制では意味をなさなくなる。
 - ・各労働者は商品生産一過程だけにに関わり、その範囲だけの「部分労働者」となる。
 - ・彼らは何の商品も生産することができない。
 - ・1個の完成した商品をつくるのは、「全体労働者」としての組織だけだ。
 - ・工場手工業が発展するほど部分労働者が増えることと同時に、労働力の価値は減っていく。
- ・分業には工場手工業的な分業と社会的な分業がある。
 - ・社会的な分業とは、ひとつの工場内で起きる専門分野への分化が、社会全体でもなされていることをいい、その典型的な例が、農村と都市の分業だ。
 - ・農村が食料をつくり、都市がそれを消費して、さまざまな工業製品をつくる、というような関係だ。
 - ・まだ商品生産が全社会をおおっていなかった昔、独立した各地域は土地に根差した自然環境があり、それに応じて生産体制が決められていた。
 - ・地域間の交通が発展するにつれ、交換が行なわれるようになる。その結びつきが緊密になると、独立していた各地域がそれぞれを補いあう分業体制が生まれ、同時に専門化される。
 - ・農村と都市でそれぞれ生み出すものは、米と時計というように1個の商品だ。
 - ・対して、工場内の労働者が生み出すものは商品ではない。
 - ・それだけでは貨幣と交換できない、部品だけだ。
 - ・同じく労働者の労働力もいわば工場の部品のひとつとなり、そこでしか役立たないものになる。
- ・工場手工業的な分業は、もちろん生産力をとても増大させる。
 - ・そのために犠牲になるのが労働者なのだ。
 - ・手工業がもっていた熟練した技術の無意味化、専門分野に応じた道具の特殊化、部分労働者の形成などを通じて、労働力の価値がますます低下していく。
 - ・しかし生産力の増加は資本の相対的剰余価値を増加させる。
 - ・前貸しされる資本において不変資本の比率は増える。つまり機械や設備などはますます大型化・高額化してくる。
 - ・工場手工業的な分業体制が歴史的に生産過程の発展から現れたものだとしても、結局それは洗練された搾取の一手段でしかない。
 - ・そしてそれがさらに発展すると、次の段階、「大工業」が待っている。

※分業して商品生産速度を上げる

- ・労働者たちが同じ場所に集まって協業をするようになると、作業を分担して行なう分業が起こる。それが工場手工業という段階である。
- ・工場手工業が誕生するまでの労働者たちは、各自が独立して商品を生産していた。
- ・時計を例にすると、時計は30ほどの工程をふまえて完成するが、時計をつくっていた労働者は、それらの工程をすべてひとりでこなしていたので、完成まで時間がかかっていた。
- ・協業が行なわれるようになり、工場手工業の段階になると、大勢の労働者で作業を分担して、生産までのスピードを上げるシステムが生み出された。
- ・ある労働者はバネを専門につくり、ある労働者は文字盤を専門につくる。そうしてみんなでひとつの商品を大量につくる。
- ・なるべく多くの人で分業して、より多くの商品をつくろうとすると、生産過程もどんどん分割されていく。バネをつくる作業をさらに分割して、バネのカーブだけをつくる人、バネを小さくする人、というように。
- ・細分化された分、道具もより専門性が必要とされて進化していく。マルクスによると、バーミンガム地方だけで500種類のハンマーがあったという。
- ・しかし同時に人間も、細分化された道具と変わらなくなる。
- ・分業は作業効率を上げるが、個々の作業したいは誰でもできる単純労働のくり返しになる。
- ・いろんなスキルをもった労働力という商品の価値を下げることになる。
- ・労働者たちは、単純作業をくり返すことで、社会の歯車となってしまうのだ。
- ・こうして労働者たち自身も工場の機械として組み込まれていく。

※社会的分業との比較

- ・マルクスは、工場手工業の工場内の分業作業が生まれた経過を考えてみるため、社会的分業というものを引き合いに出して比較している。
- ・社会的分業とは資本主義社会全体のことを指しているといってもいい。要するに商品流通のことだ。
- ・人間がひとりで自給自足できていればいいが、実際はそうもいかない。資本主義社会では、交換を目的として自分が何かをつくっている間、別の人もほかの何かをつくっているのだから、自然と分業をしていることになる。
- ・工場手工業的分業は、社会的分業がある程度発展したときに、その社会の中で生まれるとマルクスはいう。社会的分業ははるか昔から存在するので、人類の歴史はもともと分業を促進してきたわけだ。
- ・また工場手工業的分業と、社会的分業は大きく違う点があることもマルクスは述べている。
- ・工場手工業的分業の場合、工場の中に規律と計画性があり、それを守らせる工場監督がいるが、社会的分業にはそれがない。ただし、資本が社会をひとつの工場にまとめているように見えることも示唆している。

※高性能の機会を生み出す

- ・労働者の持つ労働力を商品として見るのは、資本主義社会だけの特徴だ。
- ・しかし工場手工業が誕生したことで、単純労働をくり返す労働者が増えてくると、労働力という商品の質が落ちてくる。
- ・しかしその商品が使われなくなるわけではない。むしろ熟練度の低い労働者を好んで雇用する。なぜなら工場手工業は、マルクスのように誰でもできる単純労働を実現させた画期的な革命だからだ。
- ・しかし工場手工業は道具を発達させた。これがやがて機械となり、工場手工業の次の段階＝機械制大工業へと移動していく。

100分 de 名著「カール・マルクス『資本論』」 斎藤幸平著 NHK 出版

■生産力を上げる技術革新、つまりイノベーションに資本家が求めたものは、「価値」の増殖ばかりではない。

＜◎イノベーション＝新機軸、変革＞

- ・もう一つの狙いは、労働者に対する「支配」の強化である。
- ・特別剰余価値を獲得するために、商品をできるだけ安く作るべく、資本家は労働者を「効率的」に働かせようとする。
- ・資本主義のもとで求められるのは、労働者がサボらず、文句も言わずに、指示通り働いてくれるようにすること、つまり、労働者を効率的に支配し、管理するための技術なのだ。
- ・実際、生産力が上がれば上がるほど、資本に包み込まれ、自立性を失い、資本の奴隷になると、マルクスは指摘している。
- ・一体なぜ、生産力の向上が資本による支配の強化につながるのか？

※人間が頭で考える「構想」の作業を、マルクスは「精神的労働」と呼んだ。「実行」は、自身の身体を使った「肉体的労働」である。

- ・本来、人間の作業を、マルクスは「精神的労働」と呼んだ。「実行」は、自身の身体を使った「肉体的労働」である。
- ・本来、人間の労働は、構想と実行、精神的労働と肉体的労働が統一されたものである。
- ・ところが、資本主義のもとで生産力が高まると、その過程で、構想と実行が、あるいは精神的労働と肉体的労働が分断される、とマルクスはいう。
- ・「構想」は特定の資本家や、資本家に雇われた現場監督が独占し、労働者は「実行」のみを担うようになるというわけだ。

※土鍋作りの職人仕事でみると、職人は長年の修練によって身につけた知識・洞察力・判断力を総動員して、作ろうと思う（構想する）物を、自分の手で作り出す（実行する。）。

- ・熟練の土鍋職人は、窯の温度、気温・湿度、土の状況から、修練で身につけたノウハウにより作業する。
- ・資本主義の勃興期には、欧米ではギルドやツunftと呼ばれる同職組合をつくっていた。

- ＜◎ギルド・ツunft＞・中世から近代に、ヨーロッパの諸都市に存在した同業（同職）組合。
- ・11世紀以降に有力商人たちが組織した「商人ギルド」、13世紀以降に手工業者が職種別に組織した「同職ギルド」などがある。
 - ・ドイツでは「ツunft」と呼ばれた。
 - ・同職ギルドの構成員は、職人・徒弟をかかえる「親方」で、原料の確保・技術の共有・価格の協定などを通じて結束を固めた。
 - ・18～19世紀、営業自由の原則を掲げた諸国の立法により、ギルドの特権は廃止された。
 - ・ドイツにおいても、1869年にはギルド制の歴史は終わった。

※ギルドには、様々な掟（おきて）があった。何年修行しなければ親方になれないとか、組合員が独立して工房を構える場合の弟子は最大何人までとか。

- ・さらに、利益の割合も決められ、広告も禁止されていた。
- ・規則を破った者には、厳しい罰が待っていた。
- ・これは、生産の目的が利益を上げるのではなく、みな生活を保証するために、一定の秩序を維持することであったからだ。
- ・彼らは、自分たちの「構想」力と「実行」力を自主管理することで、無用な競争を防ぎ、自分たちの仕事と労働環境を守っていたのだ。

※しかし、資本家にとっては、不利・不都合であった。

- ・例えば、土鍋を3日で100個焼いてくれと命令しても、「無理だ」とはねつけられたりする。
- ・資本家は、短時間で、できるだけたくさん生産して、剰余価値を増やしたい。そのために、労働者もどんどん増やしたい。ギルド等はさまたげとなる。
- ・だから、資本主義はギルドを解体していく。
- ・資本にとって都合の良いように、労働の技術的条件そのものを再編することで、剰余価値生産に最適な生産様式を自らの手で確立していったのだ。

■「分業」が労働者を無力化する。

- ・生産工程を細分化して、労働者たちに分業させた。
- ・生産にどんな工程があるか。どんな作業が、どの道具を使って、どのように進められているのか。
- ・職人が一人でやっている作業を単純作業へと分解していく。
- ・素人でも、熟練の職人ほど上手くはできなくとも、作業をマニュアル化し、スピードアップもできる。人員を増やし、生産規模を拡大できる。
- ・彼らが作りたいのは、安くて丈夫な、いつでも手頃な値段で買い替えられるような量産品である。

※大勢の人間が「分業」して、流れ作業で作ったほうが効率もいいし、安く生産できる。

- ・価格競争の波にのみ込まれ、商売が立ち行かなくなった職人は、廃業するか、生活していくために資本家のもとで分業に加わらざるを得なくなる。
- ・工場手工業で職を得た非熟練工たちは、工場では、決められた部分作業を毎日繰り返しやらされるため、知識や洞察力が身につかない。自分の能力をみがくことはできない。
- ・労働者が分業というシステムに組み込まれることで、何かを作る「生産能力」さえも失っていく、とマルクスは喝破（かっぱ＝物事を見抜いてはつきり言うこと）している。
- ・何年働いても単純な作業しかできない労働者は、分業システムの中でしか働けない。もはや自分一人では完成品を作る能力がないので、生活していくには、分業を組織する資本の指揮・監督・命令に従属せざるを得ないのである。
- ・しかも、誰にでもできる単純作業なので、自分の代わりになる人は、工場の外にたくさんいる。
- ・仕事を失いたくなければ、不平・不満のみ込んで、ノルマを達成すべく黙々と働くしかない。
- ・ますます資本家との主従関係が強化されてしまうのである。

■「機械」に奉仕する労働者

- ・労働者は構想する力を失い、単純作業に閉じ込められることで、人間の労働が本来持っている技能という「富」が、貧しくなっていく。
- ・その完成形が、機械化された「大工業」である。

「超訳『資本論』」 的場 昭弘 著.

第1節 工場手工業の二重の起源

◎分業の始まり

・協業とは人が集合することだったが、協業はそうした集合をした人々がそれぞれ別の仕事をするという、労働の分割→分業によってより大きな発展をする。

◎二つの仕方（内的発展と外的発展）で分業が生まれる。

・一つは、それぞれの能力を持った別々の仕事をする労働者をひとつの場所に集める。これが次第に誰でもできるような労働に分割された部門をになうようになる分業。

・次には、同じ仕事をする労働者をひとつの場所に集める。それぞれが完成商品をつくっていたが、こうした仕事場に外圧がかかり、たとえば期日までに大量の商品をつくらねばならないとかいった外圧がかかり、その命令にしたがい、それぞれが完成品をつくることをやめて、部分的労働を行なうようになる。

第2節 部分を担う労働者と道具

◎分業と機械の進化

・分業は、ますます単純な分業の一端を担う労働者をつくりだす。

・ひとつの生産過程を幾重にもわたって分割することで、その作業の中に特殊な機械をつくっていく。

・マルクスは、バーミンガムだけで500種類のハンマーが生産されていると述べているが、きめ細かな作業分割と道具は照応関係（しょうおうかんけい＝前後が同じ表現となる）をなし、道具の発展を促す。

・細かい作業に向けられた道具はさらに進化する。多目的な道具と違い、すぐに目的にそぐわなくなるからである。

・こうして、そうした道具を組み合わせた、ある大きな機械が生まれていく。

・人間の労働過程が分割され、あたかも機械のような部品の結合となっていることが前提されているのである。

第3節 工場手工業の一般的メカニズム、その二つの基本形態

——異種の部門を組みたてる工場手工業と系列的工場手工業

◎素朴な分業

・二つの種類の工場手工業がある。

① 時計の生産におけるタイプの工場手工業

・スイスとフランスの境の二つの町の時計工場の例。

・部品を小さな町工場がつくり、それを組立工場にもっていく。すべての過程がひとつの工場の中にあるわけではない。だから、こうした地域の村に小さな工場が点在している。

◎総合的分業

②一連の作業が集中している系列的工場手工業

・たとえば、縫い針生産の例。

・スミスが述べた分業の生産に近い過程である。

・個々の作業は協業とは違って、組織化されている。

・一連の流れ作業。

・「労働の連続性」「一様性」「規則性」「秩序」「労働の強化」が見出される。

・われわれが日常知っている分業に近いが、重要なのは、一人一人の労働が他人の労働に依存しあうことで、厳格な規律が求められていることである。

・チャップリンの「モダンタイムス」。人間が機械のように規則正しく動かなければならないという、非人間的な姿。

◎機械になる人間の組織

・マルクスは、この系列型の組織の様子を詳細に記述する。

・生産性を上げるために、各自がどのような人間にならなければならないか。機械とは、人間そのものの集まりであることがはっきりとする。

・工場の人間組織がひとつの機械になること、これが分業の大きな結果なのだ。

第4節 工場手工業的分業と社会的分業

◎二つの分業の違い

① 工場内の分業（工場の中で行なわれる労働の分割）

② 「社会内分業」（社会の中で行なわれる労働の分割）

- ・社会内分業は、人類の歴史の始まりから始まる。
- ・社会内分業の一定の成熟によって、工場内の分業——その初期形態としての「工場手工業的分業」が生まれると、今度は逆に社会内分業を促進していくという関係は、二つの分業がある段階から相互作用をもって発展しあうということを意味している。

※社会内分業と工場手工業的分業の本質的相違

- ・形式的には、社会内分業は広点在し、工場手工業的分業は狭くひとつの空間にある。
- ・最も大きな違い。社会内分業の間では商品売買が行なわれるが、工場手工業的分業ではそれがない。
- ・社会内分業の無政府的生産と工場内の分業における計画的生産という大きな違い。
- ・工場手工業的分業の中においては、工場手工業的分業の中間生産物は不完全な商品としてひとつの過程を通過しているだけだが、社会内分業の中では、それが商品と商品との競争という市場関係をなしていることである。

※マルクスは、「工場手工業的分業を支持するブルジョワたちは、工場の中では一種の規律と計画性が守られているのには賛成するのだが、社会がこうした規律と計画性を個々の資本家に要請することに、彼らが断固として反対するのは変だ。」と言う。

※「なぜなら、この社会がひとつの工場のような一連の組織体になればそうなるのではないかということだから、むしろ資本が社会をひとつの工場のようにしようとしているとも見える。」と、ブルジョワの意見の揚げ足をとって批判をしている。

- ・未来社会をひとつの工場のようにするという発想。ひとつの工場という状態は「一ブルジョワ、全労働者」という一種の国家独占資本主義の完成形態。

◎古い社会の問題点

- ・工場手工業的分業にある計画性も、社会内分業にある無政府性も欠くような世界——インドの共同体について。
- ・固定的な分業の再生産を共同体が管理し、工場手工業的分業を発生させないようにしている。
- ・マルクスは、その停滞性を批判している。
- ・西欧では、同業者組合による工場手工業的分業の規制がこれにあたる。（資本主義の発展により、国家的命令などで壊されていかなければならないものである。）

第5節 工場手工業の資本主義的性格

◎分業は能力を発展させられるか？

・工場手工業的分業では、労働者は資本に提供するものとして、一特殊能力を売ることを強要されるが、当然、監督労働の管理のもとに行なわれる。

- ・分業の結果、知性はどんどん発達する。

※工場手工業段階では、依然、分業においても熟練労働者が強く、男性支配の世界である。

- ・修業も長く、そう簡単に女性と児童労働が参入ができるチャンスはない。
- ・徒弟法やいろいろな法律が、一気に機械制大工業的な分業へ進むことを妨（さまた）げていた。
- ・しかし、ことは一気に変わっていく。

第一巻 資本の生産過程、 第四篇 相対的剰余価値の生産、
第十二章 分業と工場手工業

第1節 工場手工業の二重の起源

272 頁 3 行目～

・工場手工業は分業に基づく協業である。
・大約（たいやく——おおよそ。だいたい。）16 世紀の半ばから 18 世紀の 3 分の 2 期に至る工場手工業時代のことである。

272 頁 3 行目～

*工場手工業とは、同じ資本の指揮のもとで多数の労働者が相互に分業しつつ、全体としては協業を行い、一つの商品を生産する手工業の工場のことである。
*たいていの国では、封建制度が崩れ始める頃から、いわゆる産業革命にいたる時期に、この工場手工業の時代を通過している。
*イギリスは早くから産業の近代化が進んだ国であるが、ここでは 16 世紀の後半から 18 世紀の半ば過ぎまでこの時代がつづいていた。

272 頁 6 行目～

・工場手工業は二重の仕方で発生する。
① 生産物が完成するまで、独立手工業の労働者たちが、同一の資本家の指揮の下にある一作業所に結合される場合。
・例。乗用馬車という生産物・商品。
・車匠、馬具匠、指物（さしもの＝家具製品）匠、小鍛冶、真鍮（しんちゅう＝家具等の装飾に使われる銅と亜鉛の合金）細工匠、レース職、ガラス職、メッキ匠等々のような多数の独立手工業者の労働の生産物である。
・乗用馬車を生産する工場手工業は、これらの種々の手工業者を、すべて一つの作業家屋に集中し、そこで彼らは相互に協力しながら、同時に労働する。
・多くの馬車が同時に作られるならば、たえずその労働が可能となるが、単純な協業の域の中であった。
 《《《馬車を作るための協業であるが、他の生産物・商品をつくることもあった？馬車を作るための「単純な協業の域の中」であったのか？》》》》

272 頁 6 行目～

*工場手工業は次のような二種の経路で成立する。
*その一つは、各種の独立自営の手工業者たち（例えば、指物師、鍛冶屋、塗物師、車師など）が、ある生産物（例えば、住居、船、馬車）の生産のために、同じ資本の手によって結合され、同時にはたらかされるばあいである。

273 頁 2 行目～

◎一つの本質的な変化があらわれる。
・もっぱら馬車の製造のみ従事する指物匠、小鍛冶、真鍮細工匠等々は、彼の旧来の手工業を、その全範囲にわたって営む習慣が次第に失われてくるとともに、このような能力もなくする。

272 頁 8 行目～

*馬車製造工場手工業に集められた車師や指物師や鍛冶屋等々は、これまでは馬車だけでなく、自分の手にあういろいろの生産物を作ったり、加工したりしていた独立の手工業者であったが、この作業場では、彼らはもはや、資本の命令、指揮にもとづいて、馬車用だけにはたらく車師、指物師、鍛冶屋である。

273 頁 4 行目～

・他面では、彼の一面化された行為が、……………。
・馬車の製造のみに従事するという一つの面、その一面化された労働は、馬車を製造するという目的に合致したものとなる。

- ・初めは、馬車を生産する工場手工業は、さまざまな手工業者が結合されて生産された。
- ・それが、次第に、馬車生産は、それぞれ特殊作業に分割され（自分の持ち分の生産物の製造に特殊化され）、その製作作業の総体により、馬車は生産される。
- ・（製布工場手工業も）その他の多くの工場手工業も、同様に、同一資本の指揮のもとにおける、種々の手工業の結合から生じたのである。

274 頁 4 行目～

- *しかし工場手工業は、これとは反対の仕方でも発生する。
- *同一、同種の多数の手工業者が、同じ資本によって、同時に、同じ作業場で使用される場合、。
- *もとの手工業的方法で労働するのであるが、比較的大量の商品の生産が必要とされた時、労働が分割される。
- *分離、分立され、並べて配置され、割り当てられた労働が遂行される。
- *この偶然の分割が繰返され、その有益性が明らかにされ、組織的分業に固定される。
- *各自が継続的に、ただ一つの同じ部分作業のみを行う。その合同体の社会的生産物に転化する。
- *製紙工場手工業では、併行に行う部分作業が独立化された。
- *同職組合的製針業者は、一連の 20 種の諸作業を一人で順次行っていたが、製針工場手工業では、20 人の針工が各自 20 種の作業のうち一つだけを並んで行い、専属機能として、独立化された。
- *これが、二つの仕方の、もう一方の仕方による分業の発生である。

275 頁 7 行目～

- ※工場手工業の発生様式、生成は、二重である。
- ・一方では、種々の独立手工業の結合から出発する。
- ・同一商品の生産過程における、相互に補足し合う部分作業をなすにすぎない。
- ・他方では、協業から出発し、特例作業に分解し、分立化、独立化する。
- ・したがって、一方では、生産過程に分業を導入し発展させる。
- ・他方では、従来分離していた諸手工業を結合する。
- ・しかし、最終形態としては、人間を諸器官とする一つの生産機構である。

275 頁後ろから 2 行目～

- *工場手工業の分業を正しく理解するためには、その技術的基礎が依然として手工業にあるということ、また手工業の熟練が生産の要であるため、それぞれの労働者は一つの部分機能（部分的作業）に強く結びつけられるということ、そして最後に、この分業も一種の協業であり、その効果の多くは協業の一般的性質から生ずるものであるということ、あらためて確認しておく必要がある。

第 2 節 部分労働者とその道具

- ・分業により、単純作業に従事することにより、「その作業のために消費する時間が少なくなる。」
- ・一部分的部分労働である。
- ・より僅かな時間内に、より多くが生産される。＝労働の生産力が高められる。
- ・部分労働の専属化により、その方法も改良される。
- ・最小の力の支出をもって、効果をあげる。
- ・技巧は堆積され、伝達される。

277 頁 10 行目～

- ◎工場手工業は、組織的に、作業場内部で生産することにより、細部の労働者の技術を上昇させる。
- ・工業を世襲化させる、カスト（族籍）に化石化させる、ツンフト（同職組合）に骨化させる等々の、以前の諸社会の傾向に対抗するものである。
- ・カスト（族籍）の世襲制、ツンフト（同職組合）の排他性。
- ・代々伝えられる、特別の熟練。（工場手工業労働者に比べれば）非常に複雑な労働を行う。

279 頁 6 行目～

- ・手工業者は、一生産物の製作のため、場所、道具を替えて部分過程をこなしていく。

- ・労働の生産性は、手工業者労働者の技術と道具に依存する。
- ・(分業で)労働用具の分化、特殊化と、この特殊用具を使いこなす部分労働者の、二つのものが、工場手工業の特徴である。
- ・約500種のハンマーが、そのおのおの、特殊の一生産過程内の作業にのみ役立つ。
- *工場手工業時代は、部分労働者の専属的特殊機能に労働用具を適応させることによって、この用具を単純化し、改良し、多種類にする。「細分労働者とその道具とは工場手工業の単純な要素をなす。」
- *これによって同時に、工場手工業時代は、単純な諸道具を、結合から成り立つ機械装置の工業時代の物質的諸条件を創り出す。

第3節 工場手工業の二つの基本形態——異種的手工業と有機的手工業

◎工場手工業には二つの基本形態がある。

- ・この二重性は、製品そのものの性質から生ずる。

281頁後ろから5行目～

① 異種的手工業

- ・(時計製品でみると。)時計は、一人の手工業者個人的製作物であったが、無数の部分労働者の社会的生産物に転化された。
- ・ばね製造工、文字盤製造工等々、数々の部分手工業があり、最後に、時計全体を組み立てる仕上げ工がいる。
- ・(大きないくつかの時計工場手工業所があるが、)一資本の指揮の下にける部分労働者の直接の協業が行なわれる。

284頁5行目～

② 有機的手工業

- ・一連の段階的諸過程を通過する製品を生産するもの。
- ・例、縫針工場手工業
- ・72種のまた92種にさえおよぶ特殊な部分労働者の手を経る。

284頁8行目～

- *製品の製造時間が短縮され、手工業と比して、生産力が高められる。
- ・これは、工場手工業の協業から生ずる。
- ・しかし、一方で生産の段階では分立しており、一つの過程から他の過程へ、絶えず製品を運ぶことが必要であり、大工業からみると、工場手工業の原則に内在する制限として現われる。

281頁5行目～

- *ある製品、例えば時計は、独立した部分生産物の単なる機械的な組合せによってできあがり、他の製品、例えば縫針は、その完成までに一連の諸過程ないしは、諸操作を順次に経過せねばならない。
- *作られる製品のこのような差異から、工場手工業には二つの基本的な形態が現われる。
- *前者は異種的手工業とよばれ、後者は有機的手工業といわれるが、それらは、形の上の相違だけでなく、工場手工業が機械制大工業へ転化する際にも、全く異なった役割を演ずる。
- *時計についていえば、それはいまや、一手工業者の個人的製作物から、無数の部分労働者の社会的生産物に転化している。
- *しかし、最後の仕上げは、やはり、バラバラな部分品を全体としての時計に結合する仕上げ工の仕事である。
- *このばあい、部品の製造が、同じ作業場に集められた部分労働者たちの直接協業によるか、労働者の自宅労働によるかは、その時の事情による。
- *というのは、自宅で仕事をしながら労働者がお互いに激しく競争して工賃を安くし、また、生産があまりにも多くの異種的な作業にわかれているため、労働手段の共同的使用にも難があり、さらには直接的協業のための建物も節約できるので、自宅労働の結合による工場手工業経営には、それなりの利益が伴うからである。
- *しかしながら、資本家のための労働は、それが例え自宅でなされようと、資本家の指揮の下での部分労働者のそれであることに変わりなく、したがって、その地位も独立手工業のそれと全く異なる。
- *ところで、縫針工場手工業では、製品は完成まで72種から92種におよぶ連続的な作業過程を経過する。
- *この形態の工場手工業は、多数の労働者を同じ作業場に集めることによって、一つの段階から他の段階

への製品の移行に伴う時間と労働とを節約し、協業の利益を資本にもたらす。

285 頁 5 行目～

・原料の一定量をとってみるならば、工場手工業においては、種々の部分労働者の手を経過して、原料が製品となる。

・これに反して、作業場を一つの全体機構としてみるならば、原料は、一度に、そのあらゆる生産段階に同時に存在する。

・全体労働者は、多くの細部労働者の結合から成る。(細部労働とは、用具を用いて針金を引き伸ばす、他の道具を用いて、まっすぐにし、切ったり、とがらせたりする労働のこと。)

・「生産段階の一つの時間的階梯を通過する。」

時間の推移

原料 ○ → 半製品 □ → 製品 ☆ が、それぞれの部署を通り過ぎる。

・「一つの空間的並列に」

同時刻に、原料 ○ 半製品 □ 製品 ☆ が、現物として並べられる。(工場内に存在する。)

285 頁 11 行目～

・段階的過程が、時間的継起から、空間的並列に転化される。

・製品のできあがり、時間的に変化して見られることから、さらには、できあがり近づく製品の段階として、その形のまま並べられる。

285 頁 13 行目～

・同じ時間内に多くの完成商品が供給される。(例えば、1 時間分の部分労働で、1 時間分の完成商品ができあがる。)(半製品を 1 時間分作ると、製品が 1 時間分完成される。)

・この同時性は、(部分的労働の) 総過程の協業的なものにより生ずる。工場手工業においては、協業ではあるが、作業の分解によってつくりあげられているのである。

285 頁 後ろから 3 行目～

・工場手工業は、労働者をその作業部分に固定化させることによって、「労働過程の社会的組織」を達成する。中間物を完成品とする部門をつくりあげる。

286 頁 5 行目～

・部分生産物は、その製品の発展段階にすぎず、次の労働者群に、その原料を供給する。

・この労働は、次の労働のための出発点となり、次の労働者に仕事を提供する。

・工場手工業の全体では、商品ができあがる時間が経験的に確定される。商品が完成する時間が平均的に決まっているが、逆にこの時間で商品をつくるために、労働過程が間断なく、並列して進行される。商品をつくるため、お互いに必要な労働過程として、依存しあい、商品を作り上げるために、この部門の労働が強制される。

・独立した手工業(従前の一人で商品を完成させる等の)や、単純な協業(独立した手工業者の集まり)とは異なった連続性、一様性、規則性、秩序、労働の強度が産み出される。

286 頁 後ろから 1 行目～

・各個の生産者は、商品とその市場価格で売らねばならないから、その商品の生産に社会的に必要な労働時間で作り上げなければならないという外圧となるのである。

・工場手工業においては、部分的な過程の生産物を、与えられた時間内で決められた労働生産物量を供給することを求められる。これは、生産過程内の技術的な法則=しぼり、である。

287 頁 10 行目～

・部分的な過程の作成には、それぞれの作業時間があり、不等の長さである。部分作業の部分生産物は、同一時間内で、それぞれ不等量の生産物ができる。これを等量にするには、部分労働・異なる作業に、等量とするために労働者を充てる必要がある。

・活字製造工場手工業では、磨き工 1 人に対して、鑄工 4 人、分切工 2 人を充てることとなる。同種作業に、多数の労働者を使用する。→単純な協業の原則であるが、有機的關係を表わす。

287 頁後ろから 1 行目～

・工場手工業的分業は、労働過程を質的に区分することにより、単純化、多様化し、これらの過程に応じた労働者数、比率を作り出す。これは、社会的な、この商品生産の労働過程の質的構成、量的な関係・比重をより良いものへと発展させる。

288 頁 5 行目～

・部分労働者群（の労働者数）が、生産規模にたいして決まっているなら、その倍数により、生産規模を拡大できる。

・監督労働、部分生産物の運搬等は、大きな生産に有利なものとなる。これらの配置は使用労働者の増大とともに、必要となるのである。

288 頁 7 行目 梯隊（ていたい＝行軍に際し、部隊を、前衛・本隊・側隊・後衛に順次配列した時の各々の隊。）

288 頁最終行

・部分生産機能群は、同質の諸要素からなる全体機構の一つの特別部署である。

・工場手工業においては、この「群」そのものが一つの編成された労働体である。

・各種工場手工業は、生産上の基本である「群」の作業のくり返しや、「群」の倍数的配置により形成される。

・例。ガラス壘（びん）の工場手工業。三段階の部分労働生産である。①準備的段階・混合・溶解。②本来のガラス製造。ガラス塊の加工。——イギリスの例を示す。

・①準備、②加工・製造、③完結作業、である。

290 頁 6 行目～

・工場手工業は、種々の手工業者の結合から発生するのであるが、同様に種々の工場手工業のけつごうからも発展する。

・例。イギリスのガラス工場は、土製溶解坩堝（るつぼ＝熱溶融合成する際に使用する耐熱容器）をみずから製造する。生産物の工場手工業が、生産手段の工場手工業と結合。

・生産物そのものを原料とする、あるいは生産物を自己の生産物と組み合わせるいくつかの工場手工業の結合もある。

・例。鉛ガラス（＝クリスタルガラス、工学ガラス、電気用ガラス）の工場手工業。ガラス研磨業や黄銅（おうどう＝銅と亜鉛の合金）鑄造業の結合。

・黄銅鑄造業との結合は、ガラス製品に金属を嵌め込む（はめこむ＝型などに合わせ入れる）ためのものである。

・結合された種々の工場手工業は、『全体工場手工業【ゲザムマヌ・ファクトゥル】』内の分離された部分をなし、それぞれ特有の分業をもつ。

・『結合工場手工業【コンビニールテ・ファクトゥル】』は、技術的統一を獲得しており、工場手工業が機械経営に転化するとき、初めて生ずる。

291 頁 2 行目～

・工場手工業時代は、商品生産に必要な労働時間の短縮を、意識的原則として保持する。

・これは、機械の使用へと発展させる。

・大量的に、大きな力を支出する、単純、初歩的過程においてである。

・例。製紙工場手工業では、ぼろの粉碎のために、製紙用圧碎機を使用した。（ぼろ＝古繊維、使用済の衣類や布類。初めのころ、製紙工場は、その原料に木綿や麻のぼろを使った。）冶金業での鉱石の粉碎で粉碎機を使用した。機械装置の原動力は、水車による原初的伝達であった。

・手工業時代に、らしんばん、火薬、印刷術、自動時計の偉大な発明がなされた。

・しかし、機械装置は、経済学者アダム・スミスにとっては脇役であった。

・17 世紀の機械装置の応用の重要性は、近代機械学の創造へと、当時の数学者たちが、手がかりと刺激を与えたからである。

292 頁 8 行目～

・工場手工業時代の特殊な機械装置は、多数の部分労働者の結合された全体労働者自体である。

・労働者には、より多くの力、より多くの熟練、より多くの精神的注意力等々が求められる。

- ・各人個人は、これらの特性を同程度には持たない。
- ・労働者は、特性に応じて区分され、分類され、編成される。
 - ・接穂（つぎほ＝接木・つぎきの若芽）
- ・工場手工業は、一面的特殊機能に役立つ労働力を発展させる。
- ・全体労働者は、一般的な生産ができるような技倆（ぎりょう＝うでまえ、手腕）で労働が可能とされ、特別な労働者（群）は、特殊技能により、生産性を上げる。
- ・部分労働者の一面性が、全体労働の完全性となる。
- ・一面的労働は、確実に全体労働となること、規則性を持って作用させることを強制する。

293 頁後ろから 3 行目～

- ・全体労働者の種々の機能は、異なる価値をもっているが、その個別労働力は種々の訓練を必要とする。
- ・工場手工業は、労働力の等級制を発展させ、労働賃金の階梯（かいてい＝はしご）を対応させる。
- ・個別労働者が一面的機能に専属させられるとき、技倆の等級制に対応させられる。
- ・すべての生産過程は、単純な諸作業を必要とするが、この作業も専属的な機能に固定される。一つの作業部門として固定化される。

294 頁後ろから 5 行目～

- ・工場手工業は、手工業における不熟練労働者を、一階級として生み出す。
- ・工場手工業が、全ての労働能力を犠牲にして、専門の特技の域に発展させるが、あらゆる発展の欠如を一つの専門とさせる。
- ・熟練労働者と不熟練労働者への区別が生ずる。
- ・不熟練労働者には、修業費用は全く不要となり、熟練労働者にとっては、手工業者と比べると、修業費用は機能の低下によって低下する。
- ・いずれの場合も、労働力の価値は低下する。
 - 《《《「新しい総括機能を生み出すかぎりでは」とはどういうことか？》》》
 - 《《《「例外が生ずる。」の例外とは何か？》》》
- ・修業費用の欠落または減少（から生ずる労働力の相対的価値減少）は、資本の価値増殖をとまなう。
- ・労働力の再生産に必要な時間短縮することが、剰余価値の範囲を延長するからである。